

マリリン・ロビンソン『心の不在－自我の近代的神話からの内省の消失』 3*

翻訳：森本信子**

第二章 利他主義の奇妙な歴史

近代西洋世界と、宗教と形而上学が圧倒的に支配するその伝統とを隔てる大きな裂け目は、心が関与する現実の大きさに異議を唱える、現在名声を恣にする考え方によるものだ。少なくとも潜在的に、あるいは瞬間的に見えるだけにせよ、心は究極の真実に通じるだろうか。あるいは、心とは、きわめて複雑だが生物学と文化的影響とによって創られ徹底的に制約を受けた本質の放縦な現れなのだろうか。心に関するどんな言明の前にも、心が一部を占め、経験や知識としてある程度心が手に入れることのできる現実の本質についての仮定がある。

心の定義を支配する者は皆、人類そのもの、文化、そして歴史の定義を支配する。自分に関する疑問を自分に投げかけ、また、本当に重要で本当に現実を変える疑問を提起することができるという事実には、無比の人間的な何かがある。我々とは何なのか、個人としての人間、また、割り当てられる範疇における人間とは何なのか。こういった主題に関する我々の仮定と結論は甚大な影響を及ぼしてきたが、良い影響だったとは決して言いきれない。

最初に、私の先入観についてはっきりさせなくてはなるまい。まず人間の本質の最悪の衝動を抑制し、次に最良の衝動を解放するために、人間の本質を非常に高く評価することこそ賢明なことだと私は信じている。と言って、人間全部を低く評価する傾向のある、心ひいては人間の定義を力説する人たちの側の、悪意や打算を示唆したいわけではない。だが、近代および現代思想におけるこの傾向を、重大で遺憾なものと私が考えていることは明らかになるはずだ。

私が注意を喚起したいと考える類の思想と著作には、構造的に存在する特徴的な確実性があって、それは主題を矮小化する大胆さである。この類を超科学的著述と呼ぶことにする。この呼び名で想定するのは、その時代の科学を利用して、原始的生活における人間の本質の起源から始めて、人間の本質が何であり、どうあるべきかについての一連の一般的な結論へと進み、同時に、倫理的、政治的、経済的、そして・または哲学的な含蓄をそれらの結論から引き出すことによって論証する、社会理論や政治理論や人類学の、強気で驚くほど独創性の欠けたジャンルのことである。著者自身が科学者であることもそうでないこともある。この広範囲にわたって急成長する著述を特徴づける特性のひとつは、現実の本質に関するいくつかの不可欠な問いに答えるのに十分な知識を、たとえ捨てることによってだけだとしても、科学が我々に与えてきたという確信である。この確信について、実証哲学の父、オーギュスト・コントは、1848年にすでにはっきりと断言した。彼は、時代は人類の社会的再生への備えができていると考えていた。「科学者たちは3世紀の間、無意識のうちに共同作業を行ってきた。彼らは、道徳と社会現象の領域は別として、何一つ重大な食い違いを残さなかった。そして、人間の歴史が初めて体系的に全体として考察されるようになり、他のあらゆる現象と同様に不変の法則に従うことが分かった今、近代科学の予備的な労働は終わりを迎える」。今日活躍している科学者の中に、せがまれたところで、我々の現在の知識状態は十分であるとこれ

ほど自信満々に答える科学者がいるかどうか、私は本気で疑問に思う。だが、コントもまた祖先の一人であるこのジャンルの著述では、その確信の調子が根強く残り、概念的主題の進化を寄せ付けない隔世遺伝的特性を示す。

人間の本質と状況を評価して定義するために知る必要のあることはすべて知っていると言おうとすること、ましてや、知っていると断言する閉鎖的な存在論は、時期尚早であるし、常に時期尚早となりうる。「さらに何か、この知識を超えて、この知識の他に持つべき知識がある」と言い続けてきた人々の声は常に正しかった。もし、ギルガメシュ叙事詩や、科学、哲学、宗教のどの領域であれ、人間の思考のあらゆる叙事詩的冒険に込められた偉大な真実が一つあるとすれば、それは、人間の心そのものが、人間の現実の大きさについて持ちうる唯一の証拠を生み出す、ということである。我々の種の一人目がふと我々はどこにいるのかと問いかけて以来、我々はずっと宇宙の中での地位を獲得してきた。もしその答えが、それ自体偶然である物理的法則の働きの、興味深い偶然の結果が人間であるということなら、究極の現実に関する言明としては、あたかも我々が実際に少しだけ天使より低いことがわかるといった場合と同程度である。形而上学は存在のどんな側面にも有意義に取り組みないと言うことは、形而上学的な言明である。形而上学は文化の一面か誤解であり、無視することができるということもまた、形而上学的な言明である。偶然という概念は、謎を晴らすのに無益であり、大きさを減じるのに無益である。

現代世界の虚無感に関するありふれた説明は誤った分析だと私は思う。もし事実、我々の時代に特有の虚無があるとすれば、それは、そういう言い方がたいい理解される非ルター的な意味での「神の死」が原因ではない。科学の進歩の前に信仰が衰弱して、現代の経験を貧相化してしまったからではないのである。現代的倦怠が本当にあるとすれば、その一つの要因は、長い間知的な進歩と関連してきた、奇妙に権威があつて大きな影響力を持つ、超科学的著述によって提示された現実の説明から、心の感覚的生命が排除され、また、これらの説明の影響を反映する多くの思想や芸術から、感覚的生命が排除されたことかもしれない。神学でさえ、落胆する文化風景の中により完全に溶け込むため、しばしば世俗主義の名のもと、ある程度貧相化に乗じてきた。神学は、超科学的な世界観を大幅に受け入れるのに応じて、人間的生命の中で感じられる世界や、時間の中に存在する心といった、個人の魂の美しさと奇妙さを忘れる傾向もあった。だが、美しさと奇妙さはそのまま残る。さらに、神学を絶滅させても仕方ないような各種の理論や解釈を真実として吸収していった後でさえ、神学は残る。このことは、神学の本当の命は他の場所に、こういった懐疑や襲撃の届かない場所にあるということを示唆する。敬虔と尊敬と長い、長い思索の古巣は主観性である。だから、こういったものを一掃しようとする諸著作が主観性の認知を拒むのは、ひょっとすると、無能が原理と方法へと進化したからなのだろうか。

科学の進歩それ自体は、人間の主観性ほど明白な現実の特徴の認知を排除する必要もなければそうするはずもない。量子力学は主観性と客観性の区別の正当性について極めて根本的な疑問を投げかけてきた。実際今では、意識に関わりがあるらしい何ものかの現実の深部構造に広範囲の重要性を付与する提案がなされている。心のわかりにくさは、潜在力でもあり限界でもある求心性の結果である。これまでの例が示す通り、客観性を達成する難しさは、主観性の広範囲の重要性を示すにすぎない。超科学的著述における心と主観性の欠如は、その種の著述が一つには宗教への反論とし

て現れ形成されたという事実の結果でもあると言えるだろう。そしてこの著述は、意識的であれそうでないにせよ、宗教を歓迎する類の思想を、自らの用語で語り自らの主張をする可能性から排除する戦略を貫いてきた。同時に、一般形而上学は、コント以来同じ排除の企てと結び付いてきた哲学からさえも排除されてきた。諸芸術は根本的に周辺へと追いやられてきた。人間の本質を扱う際に文化の多様性は無視されるが、それはおそらく、現代の人間と、彼らの議論の中心で実は我々とただ文化的にきわめて遠かっただけかもしれない、仮定的な原始的祖先との類似を想定しやすくするためだろう。歴史に触れる時はたいいてい、科学の光が人間の出来事全体にまだ届いていなかったために繰り返される、歴史の狂気や過ちを指摘するためである。

一つの種として我々を実際に弁別する種々の事柄を排除することによる人類の定義には、奇妙な否定しがたい力がある。この排除に関してコントを非難することはない。有名な話だが、コントは、彼の言葉で言う「偉大なる存在」である「人類」の、手の込んだ儀式化された宗教を提案した。人間と社会に関する彼の理論に後継者はなく、実際、あまりにすぐに、またあまりに完全に実証的な思想から駆逐されたので、この宗教の痕跡は全く見られない。コントは言う。彼の新しい社会秩序においては、人間同士の協力「普遍的な愛への生来備わる傾向において求められねばならない。直感の迅速さと幅広さという点でも、目的の大胆さと粘り強さという点でも、自己利益のどんな打算もこの社会的本能と肩を並べることはできない。ほとんどの場合、善意の感情は利己的感情より内在的活力が少ないのは本当だ。だが、善意の感情には美しい特質があり、社会生活がその成長を可能にするだけでなく、ほとんど無限にその成長を刺激する一方、敵対する利己的感情を絶え間なく抑えてくれるのである」 諸科学を基礎として偉大な人道主義を築くことが彼の哲学の夢であり目的であった。

我々と同時代の、あるいは我々に影響力のあるどんな思想も、「普遍的な愛への生来備わる傾向」によって人類が特徴づけられると提唱しはしないだろう。コントは、ヨーロッパの革命と反革命の流血の時代に執筆したが、なお「善意の感情」の比類なき力を信じていた。人間の本質を語る今日の実証主義著述家たちは、自己利益だけが個人の行為を説明できると主張する。利己的な行為が反射反応として起こるだけだと考えられるが、たとえば目当ての報酬が社会的な承認である場合、形でごまかされる可能性はある。そして、こういう見方を議論の余地のない真実として心から継続的に受容することは、我々の考え方に画期的な影響を与えてきた。コントは、以後ずっと超科学的思想を困らせてきた、利他主義－他人の利益への滅私的献身－という言葉と概念を残すことで、自身の哲学体系の斬首に仕返しをしてきたのである。

超科学的議論には避けがたい問題がある。科学に基づく議論というものは、もとは何であれ、少なくとも変化し進歩するというまさに科学のほめるに足る傾向のために、せいぜい中期的には傷つきやすいのである。この点で、超科学的ジャンルは、実証主義の失われた確信のための後衛行動でありそれへの郷愁であるように感じられる。現在知られているように、かつてあれほど徹底的に有効に思われた理解の戦略で物理的宇宙を理解することはできないのだ。にもかかわらず、そういった戦略でこそ理解できるというのが、超科学的伝統にある著述家たちを鼓舞し続ける中心的信念なのである。

コントは、『ブリタニカ百科事典』第11版に載せた言葉の中で、人間の意識は、その神学的また

形而上学的段階を超えて、実証主義へと進化すると予見した。その記事にはこう書かれている。「その段階に至った時には、単に我々の知識の大部分ではなくその全部が、一つの特徴、すなわち、確信と科学性という特徴を刻印されるだろう。そして、知識のあらゆる部分における我々の概念作用すべてが全く同質となるだろう」。おそらく実証主義のような哲学的一元論とゆりかごを共有したために、超科学の著述においては、すべての思考に一つの特徴を刻印しようとする衝動が強大である。現代思想の諸伝統がどれほど厳密に自己矛盾を無くそうとも相互に矛盾するという事実にもかかわらず言えることだ。ただし、おそらく厳密さの結果であるのと同様に動機でもある、個人の経験を無にしようとする衝動を共有しているという点では相互矛盾がない。ウィリアム・ジェームズは、ヘーゲルに関する随筆で、哲学者の一元論が、『『必要なことはただ一つだけ』(ルカによる福音書 10 章 42 節：訳者注)と説くあらゆる宗教と同様に、最終的にそれを信じる人たちの心を貧弱な塞がれたものにする」のではないかと恐れると書いている。伝道の熱意、つまり、信仰者の支持を得ようとか、他人を仲間に誘おうといった性急な必要性和強く関連する貧弱で塞がれた心については一理あるかもしれない。この種の熱意は私が超科学的と呼んできた著述のもう一つの特徴である。超科学的著述は、コントの体系の目的と栄光の中に、解決できない異型であり刺激物である、利他主義を発見したのである。

もし私が疑り深い解釈学の実践者であつたらここで、教育的な調子にもかかわらず、これらの長説法がすでに仲間内にいる人たちにしばしば向けられており、仲間であることが賢明で本当に正しいことであるという安心感を与えようとするものであることに注意を向けるだろう。マルサスの『人口論』は、耕作可能な土地の増加に対する人口増加の推定比率を表す公式に権威を借りた。その時代の人たちは、この理論が社会政策に持つ意味を十分明確に理解した。つまり、どんな場合も彼らが見事に抑制していた、貧しい人々の苦しみに介入しようとする衝動に従えば、マルサスがあれほど客観的に表したように思われた人口規模の避けがたい限界を考慮すると、貧しい人々のより大きな痛みしか生み出さないことだろう、ということである。マルサスに影響を受けたことで有名なダーウィンは、限りある資源を求める競争が基本的で普遍的な生命の原理であるとし、『人間の由来』の中で部族間の戦争を進化の過程に織り込んだが、こういった考え方は、植民地主義と、この時期のヨーロッパ人の高い自己評価とにうまく調和した。羊が放牧された島に置き去りにされた犬における過密と飢餓に関するピーター・タウンゼントの観察から、イギリスの下層階級における飢餓という観察された事実へ、さらにマルサスがしたように、飢餓を不可避と思わせる公式へとアダム・スミスらが提起した、資源の分配に関する実際的な諸問題は無視して一進むのは、超科学的な論法の一例である。我々の起源が霊長類と原始人にあることを示す生物学的証拠から、ヨーロッパの覇権を擁護する議論へと進むのもまた、その論法の一例である。次に、超科学的な思想と著述にかつてないほど大きく興味深い貢献をしたフロイトの著作群がある。フロイトについては次の章で取り上げるつもりだ。このジャンルへの最近の貢献者であるリチャード・ドーキンスとダニエル・デネットは、自らの思想には大衆化の成功に付随する有効な権威があると自認してきた。

コントの人間観がどんなに現実離れしていたとしても、経験には、厳密でないにせよ、善意と利他主義に関連する何かがある。大多数の人間の本質には、人道的で恵み深い社会秩序という考えを喜ぶ何かがある。マルサスと、『人間の由来』を著したダーウィンの、戦争と極貧への人道的かつ宗

教的な異議申し立てを無効にする傾向によって、共感と良心が除外される。—この二つこそ、最も強烈で心を奪う個人的経験であり、どちらも誰しもの善悪の感覚を決める要因だ。それらの除外は、実のところそれなしでは世界が貧相化される心の側面の抑制であり、その正統性への強襲である。並行して、あらゆる選択と行動が支配される、道徳とは無縁の客観的な力が提唱される。この事実の照らし合わせ、我々の行為が狭い意味で本質的に利己的ではないと言えそうな場合に、物の見方が誤っていることが示される。「利他主義」、フランス語ではアルトルイズム、という言葉によってコントは、科学的な実証主義の勝利によって空白となった、神への信仰の場所を埋めるはずの、他人の幸福への滅私的な献身を指した。超科学的著述では、この言葉は常に、利他主義がありうるどうか、または好ましいかどうか、それらしい例が本当かどうか、あるいは、ある種の昆虫のコロニーに利他主義が存在することは否定しがたいが、それを説明するどんな生存上の利益が利他主義によってもたらされるのか、などを問う文脈で現れる。

ハーバート・スペンサーは、超科学的著述への初期の重要な貢献者だが、多少例外である。1879年に出版された『倫理学のデータ』の中で、コントが提示した問題を取り上げ、一つの章で利己主義を擁護し、次の章で利他主義を擁護する。利己主義を擁護する議論はダーウィンのものである。「それぞれの生物は、祖先に起因するものであれ自身が加えた修正によるものであれ、本質に根ざした恩恵と悪を持つ、という法則は、それまでずっと生命が進化する際に従ってきた法則である。そして生命がどれほど進化するやこの法則は変わらないはずだ。この自然な行動過程が今あるいは今後受けるかもしれない条件は何であれ、その過程を本質的に変えれば必ず致命的な結果が生じる。かなりの程度に、優越性が優越性の報酬を得ることを妨げる、あるいは内包する悪から劣等性を守るような計画も一つまり、優等であるのと同様に劣等である状況を作り出す傾向のあるような計画も、組織の進歩とより高等な生命への到達に全く反するものだ」。続いて、「自発的な分裂によって不断に増殖する」と彼が言う、「最も単純な生物」における生殖の理解に基づいて、次のように利他主義を弁護する。「浸滴虫類や他の原生動物が親となり、単一であることをやめた時点でその個別性は失われるけれども、その古い個体は、新しい複数の個体のそれぞれの中に存在し続ける。しかし、これら極小の動物で一般に起こることだが、休眠期が終わって、体全体がいくつもの小さい部分へと分解し、そのそれぞれが新しい体の起源となる時、親は子孫を作るのに完全な犠牲となることが見て取れる」。

スペンサーは、明らかに矛盾する2つの倫理的衝動あるいは価値観の起源を説明するのに、ダーウィンの進化論と、単細胞動物で観察される分裂という、19世紀後半に利用できた2つの科学思想の方法を使っている。彼は、これらの原因論を使って双方の衝動をある意味では正当化してから、それぞれに関連する倫理的、社会的、知的な恩恵と困難を詳細に説明し、超科学的議論の典型的なやり方で論を進める。科学の最も広い定義から外れる敷衍と結論の基礎として、その時代の科学への何らかの言及が利用されるのだ。それでも、そうした場合の複雑さを認識していることはスペンサーの名誉である。利他主義は、ダーウィンのような考え方の伝統における古典的な問題であり、スペンサーが利他主義に現実味を与え、人間の行為において正当な地位を与えたのは珍しいことなのである。とは言え、利己主義と利他主義の双方に関するスペンサーの考察で、利他主義の問題が、どちらも自己犠牲を伴うこともある正義あるいは人間性という言葉に置き換えられていることは忘れ

てはならない。その名にふさわしい正義は、それがなければ関連する力を享受できるどんな人からも、利益を取り立てる傾向がある。これが、ほとんどの人が認めるのをためらい、公平が有効な原理であると確信する時に完全に償われたと感じる犠牲である。だが、超科学はこういった主観的な考察を排除する。

経験の本質的な諸要素を記述するどんな説明モデルも不十分であることが、モデルそのものについての疑念を喚起すると考える人もいるだろうが、利他主義の問題を認識する時には、利他主義をより一層ネオ・ダーウィニズム理論に沿うものに再定義することで取り組むのが一般的である。ところで、思想としての利他主義はあらゆる点で受け身であったことはない。このジャンルの言葉を借用すれば、利他主義は場合によっては他の概念に寄生してきたのである。ネオ・ダーウィニズムの極度に儉約的な基準に戻ると、利他主義は、どこにでも現れうる、ことわざで言う悪貨である。マイケル・ガザニガは、同じく進化心理学者のジェフリー・ミラーが提示した問題を次のように伝えている。「ほとんどの言葉は、有益な情報を話し手から聞き手へ伝えるように見えるが、それは時間とエネルギーのかかることである。言葉は利他的であると思われる。別の個体に有益な情報を与えることによって、どんな適応上の恩恵が得られるのだろうか。リチャード・ドーキンスとジョン・クレブスに端を発する議論を再検討して、ミラーは次のように言う。『進化が利他的な情報共有に有利でないのは、進化が利他的な食物共有に有利でないのと同じである。したがって、動物が発する信号のほとんどは、発信者自身の利益のためにもう一方の動物の行為を操作するために進化したはずだ』そして、他の動物たちは、操作者たちの言うことを聞くことが割に合わないのに、無視するように進化してきた」。それゆえ、動物たちの中で唯一人間だけが言葉を持っているのだと思われる。なぜ言葉が複雑なのか、またなぜ我々は達者に言葉を操るのか。ガザニガは次のように言う。「この難問を考えるにあたり、ミラーは、言葉の複雑さは言葉による求愛のために進化したと提唱する。このように考えれば、雄と雌による饒舌な語りに性的な報酬が提供されることとなり、利他主義問題は解決する」。まとめよう。情報提供を担う言葉は、話し手が自己犠牲を払って他者に恩恵を与える実例をネオ・ダーウィニズム論者に示す危険がある。いや待て！操作がある！性的報酬がある！というわけだ。これが情報共有という犠牲に関する疑問の答えになるだろうか？いや、なりはしない。にもかかわらず、我々の本質があたかも、情報を所有して与える能力では人間的だが、そうすることに何の効力も喜びも見出さないと仮定された原始人たちの本質によって決定されているかのように定義されるのである。

これは、利他主義と呼べそうなものが人間の行為の多くで突き止められるという事実、また、突き止められることが明らかでさえあるところで排除されるという事実の一例である。この排除は、淘汰されるまでおそらく動物に操作能力があったことから、重要な進化の諸問題—たとえばつがいの絆や動物の脳の初期の歴史—の理解に重大な意味を持つ理論を練り上げることによって行われる。原始的な言葉を持つ我々の祖先が、雄弁な原始的な語り—「ああ、壁に蠅ありき！」—によってつがいの相手を探したという考えは魅力的だけれども、何か人を喜ばす習性を基にして選ぶのに相応しい相手をプールしていたということはめったになかった。族内婚や、小集団間での限定的な族外婚、娘の交換、地位の配慮などすべてが関わってくる。世界的にも歴史的にも、我々の文化がいかに流動的であり、我々の結婚習慣がいかに例外的であるかを、アメリカの人類学者たちは忘れてい

るようにしばしば思われる。ピュラモスとティスベー、エロイーズとアベラール、ロミオとジュリエットは、たとえ彼らが生存していて生殖が可能だとしても、あまりにも例外的すぎて遺伝子プールに影響を与えなかったことだろう。さて、操作の能力があり、さらに操作に無関心でいる能力があり、それゆえ操作の能力が失われた動物について考えてみよう。この最初の複雑性はどのようにして現れたのか？現代の動物は他者の動機に対し当時と同等の洞察力を持っているのか？かの脳科学者たちは持っていないと答える傾向があるが、そういった洞察力は生存上明らかな優位性を与えられると思われる。人間の言葉という現象が提示すると考えられる犠牲と恩恵の問題に関する、このような理論的な継ぎはぎは、子供向けななぜなぜ物語を彷彿とさせる。このように、利他主義の亡霊は、アリの脳内のランセット吸虫のように、ダーウィンの議論をゆがめ、正当な名声を得ているその概念的単純さをはるかに超えたところに向かわせる。

アリとランセット吸虫の話（アリが草のてっぺんに登って羊に食べられるという一見自己犠牲的な行為は、実は脳内に寄生したランセット吸虫が羊の肝臓に寄生する生存戦略のためにアリを操作しているという話：訳者注）はダニエル・デネットから拝借したが、彼のジャンルの読書をするときよく思い出したとえだ。たとえば、気の毒なフィニアス・ゲージを考えてみよう。この鉄道労働者は150年以上前に、頭蓋骨に鉄棒を貫通させる爆発事故に遭って生き延びたことで有名だ。ウィルソン、ピンカー、ガザニガ、アントニオ・ダマシオらは皆この話を利用して、性格や人格として考える行為の諸側面は脳の特定の領域に存在し、彼らの見るところ、この事実は個別的な性格という考えを幾分危うくし、好ましい性質が我々の本質に内在するという概念を覆す、と主張する。

フィニアス・ゲージについては実際にはほとんど何もわかっていない。超科学的文脈で彼を取り巻く科学的知識は、ひどい障害は残らずに回復したが、社会的能力だけは別だったという趣旨での、出所の不確かな数個の逸話を基にしている。ガザニガは「ゲージは、翌日の地元紙で痛みがないと報道された」と書いている。さて、上顎が砕け片目を失い、しかも1848年の出来事だったことを考えると、もし本当に痛みがなかったとしたら、確かに脳の損傷を示すだろう。だが、事故の数分後に理にかなった一貫性のある話をしたことも考え合わせると、むしろ彼の脳は幾分傷を免れたが、それまでずっと『気まぐれで、不遜で、ひどく冒流的』になることを防いだ大脳皮質の部分は傷ついたことを示すと考えられる、という理屈である。事故当時彼は25歳だった。養うべき家族はいたのか？希望はあったのか？これらの問いは、彼が回復するにつれ現れてきた怒りと混乱を理解するのに、小説的な興味を超えるもののように私には思える。

この逸話は多くの語りを通して奇妙なほど画一的である。まるで、前頭葉が抑制しなければ罵詈雑言を吐きながら現れるハイド氏が我々皆の中にいるかのようである。どんな種類の言語であれ人間的で文化的なものなら、言語は確かにひどい冒流であり、次いで不遜ではあるが、とにかく何かを意味するための引き立て役としての威厳は持っているはずだ。もしヴィクトリア朝の人たちにこの行為が内的な野蛮性の出現のように思われたなら、これは十分理解できる。だが、現代の目で見ると、ゲージが突然醜く半ばめくらになり、長引く脳の感染症を患い、ガザニガによれば「体力の回復にさらに長い時間がかかった」という事実が、彼の冒流の一部を説明するだろう。というのも、結局のところ、そういう機会のために文化と言語が冒流を備えてきたからである。だが、現代の著

述家たちに損傷があったと考えられているゲージの脳の部分は、感情をつかさどる場所とされている。したがって、—この論理は私にはよくわからないが—彼の呪いや天への罵りは、他の人間が同じことをした場合の意味とは異なるだろう。ダマシオは、ゲージに広い関心を寄せ、報告されている性格の変化について標準的な解釈を示している。「現代のフィニアス・ゲージ」として、知的な損傷は受けなかったが、「最も有利な行動過程の選択能力」を失ったある患者の症例を相当長く引用している。ゲージ自身、「将来に備えて計画し、以前身に着けた社会規範に則って振る舞い、最終的に生存に最も有利となるだろう行動過程を決定する」能力が損なわれて「みじめに」振る舞った。これと同じことはエイハブ船長（メルヴィルの小説『白鯨』の登場人物。白いクジラに片足を食いちぎられ復讐心を燃やす船長：訳者注）にも確実に言えるだろう。ならばひょっとしたらメルヴィルは、崇敬の念をつかさどる器官は脚にあることを示そうとしたのかもしれない。私が言いたいのは、フィニアス・ゲージを解釈するのにふさわしい別の文脈とは、体にひどい外傷を負った他者、特に傷のせいで醜くなってしまった他者なのではないかということだ。ゲージを正當に評価すれば、最後の病気まで間断なく仕事を得ていたことは感動的な事実である。仕事を転々としたこと—呪いや短気以外で彼の唯一の罪—ことは学問的非難を受けるのに、彼に対する他人の反応はどんなものだったのだろうと考える者はいないのである。

私が気の毒なフィニアス・ゲージのことを騒ぎ立てるのはただ、彼の苦悩を数え上げることに、彼が考えも感じもする人間であり、数奇な恐ろしい運命に見舞われた男であるという感覚が欠けていることを指摘するためである。彼の主観性の認識の欠如により、この災難への反応は、期待や信仰や自己愛の損傷ではなく、大脳機構の損傷を示すものとして扱われる。まるで、この話を語る時の著述家たちは、人間という種に対して自ら想定する、同情的な想像力や善意の欠如の一端を担っているかのようなのである。さらにもう一つ言うべきことがある。この逸話は心に関する、また人間の本質に関する言明にとってあまりに重視されすぎている。この話は、人間の本質の基礎ほど重要な問いに関する議論では、どんな場合もその中心となるべきではない。時間的に離れすぎており、最初の記述があまりにも骨相学的であり、煽情主義に汚染される可能性が高すぎるので、証拠としての重要性を持ちえない。ゲージが死ぬまでの13年間痛みがなかったと本当に信じていいのだろうか。中身が飛び出るほど重症の頭蓋骨の傷はどんなふうに治ったのだろうか。ただ一つ導くことができる結論は、ある男が1848年に、2009年現在生きている男の場合に想定できるのとはほぼ同じように、身体的な重傷に反応したということだけだ。この逸話の決まり切った現れ方、逸話の一部ではあるがなくても構わない詳細の記述、そして、そこから導かれる結論は、超科学的思考と本物の科学との違いを完璧な形で示すものである。

* Marilynne Robinson, *Absence of Mind: The Dispelling of Inwardness from the Modern Myth of the Self*. New Haven: Yale University Press, 2010. pp.31~pp.50. 東京薬科大学紀要第16号掲載の続きである。紙面の都合上、原注は割愛させていただいた。

** 薬学部第4英語研究室